

令和 2 年 7 月 6 日現在

機関番号：11401

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05923

研究課題名（和文）中高生の同輩集団内に形成される力関係のメカニズムの解明

研究課題名（英文）Research for power relationships formed within peer groups of junior and senior high school students

研究代表者

鈴木 翔（SUZUKI, Sho）

秋田大学・理工学研究科・講師

研究者番号：40756855

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、小学生から高校生までも視野に入れ、複数のデータの分析から、同輩集団関係と学校生活の関連性をめぐる日本の特質を明らかにした。その結果、明らかになったのは以下の3点である。第一に、小学生段階からすでに同輩集団関係が学校生活に及ぼす影響力は色濃く、いじめ被害傾向にも寄与している。第二に、小学生から高校生に至るまで、男子よりも女子の方が同輩集団関係の影響力が高い。第三に、高校生段階では、学校行事などの特別活動の中で、その影響力が顕在化しやすい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の貢献は、以下の三点である。第一に日本の学校生活のあらゆる場面で、同輩集団関係が強固な影響力を有し、その在り方によって、学校適応できるか否かが左右されるということを示した。第二にその在り方は性差によって異なり、女子の方が同輩集団関係の影響を受けやすいことを実証した。そして第三に、同輩集団関係の影響力は、学校行事などの特別活動の中で顕在化しやすいことを指摘した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify the characteristics of the relationship between peer group relationships and school life in Japan by analyzing multiple data from elementary school to high school students. As a result, the following three points were clarified. First, group relationships among peers have a strong influence on school life from the elementary school level, contributing to the tendency toward bullying. Second, from elementary school to high school, girls are more influential in peer group relationships than boys. Thirdly, high school students tend to show their influence in extra-curricular activities such as school events.

研究分野：教育社会学

キーワード：同輩集団 生徒文化 いじめ 中高生 中学生 学校適応

## 1. 研究開始当初の背景

これまでの研究において、日本のいじめは、他国に比べて以下の2点に特徴があることが指摘されてきた。その1つは、明らかな体格差がある上級生から下級生へのいじめよりも、同窓生、もしくは同級生などの同輩集団の関係性において生じやすいということであり(森田ら2001)。もう1つは、犯罪性を伴うような誰の目から見ても明らかな「暴力系」のいじめ(傷害や恐喝など)よりも、加害者や被害者ですら「いじめ」かどうかの判断がつきづらい「コミュニケーション操作系」のいじめ(無視や接する態度を変えるなど)が主流だということである(内藤2001)。

つまり、日本のいじめは、同輩集団という彼らの生活の中で最も接触頻度の高い集団の中で発生しやすく、かつ、いじめとしての関係性を発見することが困難だということだ。そのため、日本では多くの児童生徒に「いじめはよくない」という規範がある程度共有されているにもかかわらず、未だにいじめの解決、解明には至っていないという現状がある。

とはいえ、いじめの解決、解明の糸口が全くないわけではない。というのも、2000年代以降、いじめへの直接的なアプローチではないにしろ、いじめの培地になる可能性を持つ、同輩集団内の力関係が、主に中高生の間関係性をめぐる議論の中で俎上に載せられてきているからだ(上間2002, 上床2011, 知念2012など)。

これら中高生の同輩集団内の力関係をめぐる議論の中では、それぞれ言葉の使い方は異なるものの学級集団内に自然発生的に生まれるインフォーマル・グループが「ヤンチャ」「インキヤラ」「ギャル」「オタク」「イケてるグループ」「イケてないグループ」のように集団内で影響力を持つグループと、持たないグループとの間を対比する形で語られてきた。どちらのグループに所属するにせよ、一見気の合う仲間と自然にグループを形成しているだけのようにあるにもかかわらず、集団内の主導権は特定のグループに所属する生徒にのみ与えられているというような指摘である。そして、それぞれのグループが持つ影響力の差、いじめへと発展していく可能性も指摘されている(岩宮2009, 本田2011, 鈴木2012など)。

一方、国外の研究に目を向けると、アメリカの生徒文化研究では、インフォーマル・グループ間の影響力の差が彼らの学校適応に大きな影響を与えていることが明らかにされている(Eckert 1989, Kinney 1993など)。ただし、アメリカでその関係性が自明視されている背景には、人種間の差別が起因していることがわかっている。つまり、肌の色が違えば、所属するグループは違って当然であり、そこに力関係が生じることに疑問を抱きづらいという価値観が背景にあるということだ。そのため、アメリカでは、グループ間の影響力の差、それ自体は問題視されることはなく、人種間の差別意識に起因した国民全体の自明の問題だとして認識されている。

しかし、わが国においては、僅かな例を除いて、国民間の自明的な差別は感じづらく、インフォーマル・グループ間の影響力の差には合理性が伴わない。そのことから、多感な年齢期に当たる中高生の学校生活に与える影響は、アメリカに比べ、相対的に大きくなることが想定できる。このような研究動向を踏まえ、本研究は着想された。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、いじめの培地になる可能性があるが指摘されていながら、実証的な解明が進んでいない「中高生の同輩集団内の力関係のメカニズム」について中高生を対象とした多角的な調査を行い、そのデータの分析から、いじめへの早期発見や早期解決に資する知見を導き出すことである。本研究では、以下の2つの分析課題の検証を通して、知見を導出することを当初の目的として設定した。

分析課題1) どのような契機を経て、生徒間に力関係の認識が生まれ、学級集団内で共有されていくのか。

分析課題2) どのような要因が、生徒間の力関係の形成を促すのか。

## 3. 研究の方法

研究方法としては、既存の質問紙調査の二次分析のほかに、新たにデータを収集して、質問紙調査及びインタビュー調査を行うことにした。また、調査を進めるとともに、問いを設定し直し、当該課題の分析課題を焦点化し、関連する先行研究を整理するも同時に行っていった。

## 4. 研究成果

研究成果については、2016年度の日本道徳教育学会で口頭報告を行ったほか、論文として4本執筆して成果を公表した。また先行研究の整理については、著書等でも公表した。

データの分析を行った結果、明らかになったのは以下の諸点である。

男子女子の両方の小学生文化において、容姿のコンプレックスといじめ被害傾向は関連を持

つ。なお、男子に比べ、女子の方がその様相が色濃い。

男子は集団に適応している児童において、容姿のコンプレックスといじめ被害傾向が関連を持ちやすく、逆に女子では集団に適応していない児童のみ、容姿のコンプレックスといじめ被害傾向は関連を持ちやすい。

高校生になると、男子はクラスで友人数が少ないことが、文化祭を楽しみにできないことへつながっており、それを媒介して実際の文化祭に消極的な参加態度を示している。

高校生になると、女子は、向上心をかき立てられるような友人がいないことが、文化祭を楽しみにできないことへつながっており、それを媒介して実際の文化祭にも消極的な参加態度を示している。

高校生になると、男子は、友人関係の状況が体育祭への消極的な参加態度にはつながっていないが、女子は、向上心をかき立てられるような友人がいないことが、体育祭を楽しみにできないことへつながっており、それを媒介して実際の体育祭でも消極的な参加態度を示している。

中高生の男子では、「親友数」(悩みごとを相談できるような友だちの数)の多さが登校意識へと結びついているが、女子では「いつメン数」(一緒に行動するような友だちの数)の多さが登校意識へと結びついている。また女子の「いつメン数」の多さは学校の楽しさを媒介して登校意識へと影響を与えている。

中高生では、男女ともに教師との関係性が良好であることは登校意識へと結びついているが、男子については、教師との関係性が学校の楽しさを媒介して登校意識へと影響を与えている。

中高生の男子においては、学校の成績や教育アスピレーションが高いほど登校意識が高いが、女子においては、そうとはいえない。

校則の厳しさや学校の勉強の正統性といった意識は、男女ともに登校意識へと影響を与えていない。

これらの知見を踏まえて、本研究への貢献を述べる。

本研究の貢献は、以下の三点である。第一に日本の学校生活のあらゆる場面で、同輩集団関係が強固な影響力を有し、その在り方によって、学校適応できるか否かが左右されるということをも明らかにしたこと。第二にその在り方は性差によって異なり、女子の方が同輩集団関係の影響を受けやすいことを実証したこと。そして第三に、同輩集団関係の影響力は、学校行事などの特別活動の中で顕在化しやすいことを指摘したことである。

しかし、本研究の課題には課題もある。その課題の一つは、いつ、どこで同輩集団関係の影響力が増すのか、ということをおきらかに出来なかったことである。この点については、まだ分析に着手できていないデータをみつめなおし、再分析を行うことで明らかに出来ると考えている。今後も引き続き、データの分析を進めていきたい。

#### 引用文献

知念渉, 2012, 「ヤンチャな子らの学校経験 学校文化への異化と同化のジレンマのなかで」『教育社会学研究』第 91 集, pp.73-94.

Eckert, P., 1989, *Jocks and Burnouts: Social Categories and Identity in the High School*, Teachers College Press.

本田由紀, 2011, 『学校の「空気」』岩波書店。

岩宮恵子, 2009, 『フツーの子の思春期 心理療法の現場から』岩波書店。

Kinney, D. A., 1993, "From nerds to normals: The recovery of identity among adolescents from middle school to high school", *Sociology of Education*, Vol. 66, No. 1, pp.21-40.

森田洋司監修, 2001, 『いじめの国際比較研究 日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析』金子書房。

内藤朝雄, 2001, 『いじめの社会理論 その生態学的秩序の生成と解体』柏書房。

鈴木翔, 2012, 『教室内カースト』光文社。

上間陽子, 2002, 「現代女子高校生のアイデンティティ形成」『教育学研究』第 69 巻第 3 号, pp.367-278.

上床弥生, 2011, 「中学校における生徒文化とジェンダー秩序 「ジェンダー・コード」に着目して」『教育社会学研究』第 89 集, pp.27-48.

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 4件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 鈴木 翔	4. 巻 106
2. 論文標題 登校意識の社会的性差	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育社会学研究	6. 最初と最後の頁 pp.167-187
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木翔	4. 巻 25
2. 論文標題 高校生の友人関係の状況が文化祭および体育祭への消極的な参加態度に与える影響：都立高校生を対象とした質問紙調査データの分析から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本高校教育学会年報	6. 最初と最後の頁 28-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 歌川光一・鈴木翔・岡邑衛・佐々木基裕	4. 巻 936
2. 論文標題 生徒指導上の問題としての援助交際再考	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学苑	6. 最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 中村豊・歌川光一・岡邑衛・鈴木翔	4. 巻 4
2. 論文標題 生徒指導で育まれる社会的リテラシーに関する研究：大学生を対象とした予備調査から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京理科大学教職教育研究	6. 最初と最後の頁 23-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木翔・岡邑衛・歌川光一・中村豊	4. 巻 21
2. 論文標題 中学時の特別活動の参加経験と学級生活の関連性に関する検討：全国の大学生を対象にした質問紙調査の分析から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 秋田大学教養基礎教育研究年報	6. 最初と最後の頁 55-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木翔	4. 巻 57
2. 論文標題 身体的特徴の自己認識といじめ被害傾向の関連性をめぐる小学生文化に関する一考察	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学大学院教育学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井陽介・鈴木翔	4. 巻 21(2)
2. 論文標題 養護教諭が抱える困難性に関する一考察：男性一般教員・女性一般教員・養護教諭の三者比較から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本養護教諭教育学会	6. 最初と最後の頁 95-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鈴木翔
2. 発表標題 小学生の外見コンプレックスといじめ被害傾向の関連性の検証：仲間集団への関わり方に着目して
3. 学会等名 日本子ども社会学会第23回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木翔
2. 発表標題 なぜいじめは止められないのか？
3. 学会等名 日本道徳教育学会第87回（平成28年度春季）大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 鈴木翔
2. 発表標題 小学生の外見といじめ被害傾向：外見コンプレックスの有無とその部位に着目して
3. 学会等名 日本道徳教育学会第88回（平成28年度秋季）大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 歌川光一・水引貴子・井陽介（編著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 教職課程教育実践研究会	5. 総ページ数 295
3. 書名 教員としての資質能力向上に向けた実践ポイント集	

1. 著者名 須藤康介（編著）	4. 発行年 2017年
2. 出版社 明星大学出版部	5. 総ページ数 266
3. 書名 教育問題の「常識」を問い直す：いじめ・不登校から家族・学歴まで	

1. 著者名 歌川光一・野内友規編著	4. 発行年 2016年
2. 出版社 三恵社	5. 総ページ数 184
3. 書名 教職をめざす大学生のための青少年文化概論：教育の基礎的理解に向けて	

1. 著者名 生徒指導・進路指導：理論と方法（教師のための教育学シリーズ）	4. 発行年 2016年
2. 出版社 学文社	5. 総ページ数 226
3. 書名 林尚示・伊藤秀樹編著	

〔産業財産権〕

〔その他〕

researchmap <a href="https://researchmap.jp/showsuzu/">https://researchmap.jp/showsuzu/</a> 秋田大学研究者総覧 <a href="http://akitauiinfo.akita-u.ac.jp/html/100000482_ja.html">http://akitauiinfo.akita-u.ac.jp/html/100000482_ja.html</a> researchmap <a href="https://researchmap.jp/showsuzu/">https://researchmap.jp/showsuzu/</a>
--

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考